

# 戦場にかける橋

2007(平成19)年4月18日鑑賞<OS名画座>

★★★★



監督=デビッド・リーン/原作=ピエール・ブール『クワイ河の橋』/出演=アレック・ギネス/ウィリアム・ホールデン/早川雪洲/ジェームズ・ドナルド/ジャック・ホーキンス/ジョフリー・ホーン/アンドレ・モレル/ピーター・ウィリアムズ/ジョン・ボクサー/パーシー・ハーバート/ハロルド・グッドウィン/アン・シアーズ/大川平八郎/勝本圭一郎(コロムビア配給/1957年アメリカ映画/155分)

## 第2章

面白くてためになる

……橋の建設をめぐる、イギリス軍のニコルス大佐と捕虜収容所長齋藤大佐との間で展開される「交渉」は、騎士道 vs. 武士道のガチンコ対決だが、結局イギリス側に軍配が……。他方、自由と個人を重んじるアメリカ人将校の行動の奔放さと任務感も面白い。こんな悲劇がくり返されないために、私たちは今何をなすべきか？ そんなことを考えながら、あの「クワイ河マーチ」の口笛ソングが耳に残る1957年の名作を、50年後の今じっくりと鑑賞できたことに感謝！

## 英・米・日の比較は……？

OS名画座で開催されていた「大作映画特集」で観たのが、1957年に公開されたこの名作。この映画の舞台はビルマ・タイ国境近くにある日本軍の第16捕虜収容所だから、力関係からいえば日本が圧倒的で、その捕虜となっている米兵・英兵はずっと下。しかし、映画におけるウエイトとしては英米日の順……？

誇り高きイギリス人将校ニコルス大佐(アレック・ギネス)はイギリス流の騎士道、収容所長の齋藤大佐(早川雪洲)は日本流の武士道が、軍人として生きている彼らの基盤であり信条。これに対して、アメリカ軍捕虜のシアーズ少佐(ウィリアム・ホールデン)のそれは、新興国家アメリカらしく、自由主義・個人主義……？

イギリス人監督の巨匠デビッド・リーンは、そんな三者三様の面白い対比をさ

せながら、戦争という極限状態での人間の誇りや尊厳を見事に描いている。もっとも、イギリス人監督がイギリスびいきをするのは当然だろうから、齋藤大佐の描き方やシアーズ少佐の描き方については異論のある人も多いのでは……？

ちなみに、この映画で早川雪洲はアカデミー賞助演男優賞にノミネートされたにとどまったが、アレック・ギネスは見事に1957年度第30回アカデミー賞主演男優賞を獲得した。なお、ウィリアム・ホールデンについては、面白いネット情報によれば、『サンセット大通り』（50年）、『麗しのサブリナ』（54年）、『ピクニック』（55年）、『慕情』（55年）と1950年代のハリウッドを快調に飛ばしていたホールデンが、これ以降の作品歴がパッとしなくなり、「ホールデン凋落のきっかけになったこの大作」「結局割りを喰ったのは報われない敵役を引き受けてしまったアメリカ人のホールデンというわけか」との意見もある……。

## やはり技術や知識は、英日……？

日本は1868年の明治維新以降、文明開化の流れの中急速に先進文明国の仲間入りをしていくとともに、技術や知識の習得に励んだ。そして、日清戦争（1894年）、日露戦争（1904年）の勝利と第一次世界大戦で戦勝国イギリスに協力したことによって、先進西欧諸国と肩を並べる新興国家となった。特にイギリスとは1902年に締結した日英同盟によって、戦後日本における日米同盟以上の強い絆で結ばれていた。ところが、そんな友好関係にかけりが見えたのは、1920年代後半からの西欧列強との軍備拡張競争そして日本の中国北東部への進出と満州国の建設によるもの。そして、泥沼化した日中戦争のケリをつけるべく挑んだのが、無謀な英米開戦だった。しかしいくら頑張ってきて、技術や知識にかけては、やはり西欧諸国とりわけイギリスの方が日本よりずっと上……？

クワイ河にいかにして短期間にしっかりとした橋と鉄道を建設するかというこの映画での議論を聞いていると、どうしてもそんな風感じてしまうが……？

## 今思うに、やはり日本人は交渉ベタ……？

この映画の前半は、将校も架橋工事のための労働に従事せよと命令する齋藤大佐と、ジュネーブ条約によって捕虜となった将校を労務に従事させることは禁止

されていると主張するニコルスン大佐との対立、というよりも「意地比べ」が焦点……。

ガンとして命令に従わないニコルスン大佐は1人部屋(?)に監禁され、他の将校たちも全員まとめて監禁されたが、イギリス人とりわけニコルスン大佐はプライドが高いえ頑固だから、いくら脅しても、また途中から作戦を変えて懐柔しようとしても、翻意しなかった。そして、遂に3月10日の陸軍記念日、すなわち日露戦争に日本が勝利した日に、齋藤大佐は「記念日における恩赦」というカッコだけつけて、結局ニコルスン大佐をはじめとする将校全員を釈放することに……。これは、意地比べにおける齋藤大佐のミエミエの敗北なのだが、イギリス紳士は敗者に対しても寛容で、「それみたことか」というような姿勢を全く見せないばかりか、逆に意外にも架橋工事への協力を申し出た……。

将校の労役従事の可否をめぐる、齋藤大佐とニコルスン大佐とのこんな意地比べのドラマを今観ていると、やはり日本人は交渉ベタ、つまりなぜ最初から将校を労働に従事させることにそんなにこだわり、無駄な紛争を生じさせるのか、と思わざるをえなかったが……。

## ニコルスン大佐の価値観の是非は……？

ニコルスン大佐からのそんな申し出には齋藤大佐もビックリ。というより、齋藤大佐の頭ではそんなニコルスン大佐の発想は全く理解できなかったはず……？ニコルスン大佐が架橋工事への協力を申し出たのは、将校たちが監禁されている間、兵士たちが労働をさぼり、今や緩みきっている軍規を回復させるためには、兵士たちに何かの目標を与えることが必要と判断したため……。

デビッド・リー監督は、いかにもそれがイギリス人らしい誇り高い行動であるかのように描いており、それがこの映画後半の大きなテーマとなる。もちろん、イギリス軍将校の中にも「それは利敵行為ではないか……」と疑うクリプトン軍医(ジェームズ・ドナルド)のような現実派もいる。私の価値観からしても、「本橋梁は1943年2～5月、イギリス軍将士により建造されしものなり」と書いたプレートを誇らしげに打ちつけているニコルスン大佐の価値観には同意できない。捕虜になったのは仕方ないとしても、それならそれで捕虜の立場として、イ

ギリスのために何ができるのかを考えることが軍人の本分であって、日本軍のために活用される鉄道と橋を完成させる労働に精を出すことによって、自分の隊の軍規を維持するというのはいかにもナンセンスとってしまう……。さて、あなたの価値観は……？

## シアーズ少佐の価値観は……？

アメリカ人が冒険好き（？）だということは、脱走してもジャングルの中で死ぬだけ、という確信のもとに鉄条網すら施していない第16捕虜収容所から、シアーズ少佐だけは数名の仲間を募って脱走を図ったことから明らか……。齋藤大佐の下で働かされて死ぬ確率が高いのなら、脱走して死ぬ確率が高くて、脱走した方がマシというシアーズ少佐の価値観は、いかにもアメリカ人的……。そんな冒険主義者（？）シアーズ少佐の脱走の成否は……？

また、今やイギリス軍病院の中でわが世の春を謳歌しているシアーズ少佐に対して、イギリス軍特殊部隊のウォーデン少佐（ジャック・ホーキンス）が持ちかけたのは、完成した鉄道と橋を爆破するという命がけの特殊任務。地理に疎い自分たちのために、道案内をしてほしいというわけだ。

現在、病院の看護婦（アン・シアーズ）と「いい仲」になっているシアーズ少佐にとって、再びあの悪夢のような場所に行くなどということは論外！ そうはねつけたシアーズ少佐だったが、結果的にはウォーデン少佐らと共に特殊部隊の任務に就くことに……。こんなシアーズ少佐の価値観を、さてあなたはどのように評価するだろうか……？

## こんな皮肉、こんな悲劇が……？

スクリーン上で展開されていたさまざまな物語は、次第にクライマックスに向けて取れんされていく。遂に、鉄道と橋は完成した。感慨深くその橋を見守っているニコルソン大佐の目は、まるで愛しいわが子を見ているよう。イギリス軍捕虜たちも、今晚は陽気に騒ぎ、明日の開通式を迎えるようだ。

他方、齋藤大佐は……。こちらは筆を持って何やら書いているが、人を寄せつけないその雰囲気はちょっと異様……。目標どおり鉄道と橋を完成させたこ

とによって、彼は次に一体どんな行動をとろうとしているのだろうか……？

そして、ウォーデン少佐らと共に岩影に隠れて橋を見下ろしているシアーズ少佐は、今、橋を爆破するための決死の作戦を練り上げたところ。あとは人事を尽くして天命を待つのみだ。

こんな三者三様の立場で、一夜を明かした彼らを待ち受けている運命とは……？ 立派に完成した橋、仕掛けられた爆薬、走ってくる一番列車。そんな状況の中、水が引いたクワイ河を見ながら、ある異変に気づいたニコルス大佐はどんな行動を……？ そしてそれに対して、齋藤大佐やシアーズ少佐はどんな対応を……？ スクリーン上で展開される最後のクライマックスシーンは、スリル十分かつ見どころ十分。しかし、こんな皮肉かつ悲劇的な結末を、一体誰が予想したのだろうか……？ そんな結末は、あなたの目でしっかりと……。

2007(平成19)年4月20日記

ミニコラム

### ユーキャンの『昭和』から学ぶ

今、私の手元にユーキャン企画・発行の『昭和』上下という箱入りの分厚い本がある。これは文字どおり、昭和元(1926)年から昭和64(1989)年までの激動の時代を写真と解説で綴った貴重な参考書。政治・外交・軍事・経済のみならず、風俗・芸能・スポーツまでその情報は豊富で読みやすい。ヤンキー先生こと義家弘介氏の参議院選挙立候補などによって、教育再生会議の成果が見えなくなってしまったが、昨今の歴史教育のダメなところは、近代史を全然学ばないところ。〇〇史観、△△史観の議論も大切だが、歴史的事実として昭和の新聞記事から当時の世相を学ぶことはもっと大切。そうする

ことによって必然的に、昭和の歴史＝戦争の歴史についても学ぶことになるはずだ。

『戦場にかける橋』の舞台は、ビルマ・タイ国境近くの捕虜収容所。なぜ日本軍がそんなところに？ しかも捕虜の多くはイギリス人。「あれ、日本はアメリカと戦争したんじゃないの？」と疑問をもつ若者も多いのでは？ しかし、それが昨今の若者の歴史認識だとすれば、日本国にとってとんでもない事態。たまには、テレビを消してこんな本を広げ、家族で昭和の歴史を勉強する必要があるのでは……？

2007(平成19)年7月13日